

## 第7章 地域づくりの方向性

地区のまちづくりには、どのように地域資源を活用することで地区内外との連携が可能となり、相乗効果を得て、地区の魅力を高めることが出来るかを考える必要があります。

また、他にはないこの地区ならではの『            タウン』を創造するために、この地区に関わる人たちがまちづくりを考え、協働してことが重要となってきます。

ここでは、それら「地域づくり」の方向性について考えます。

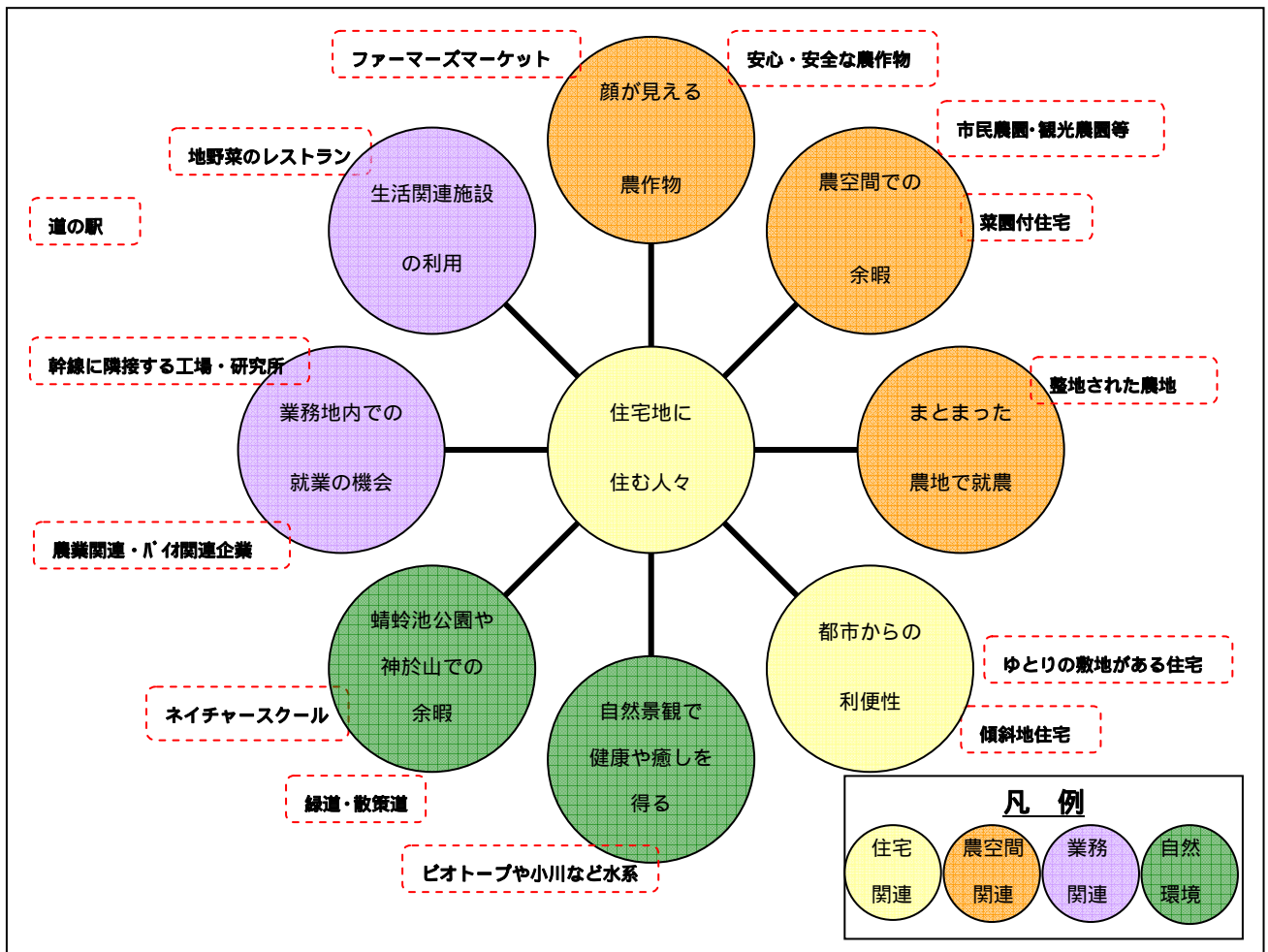
### 1 共存・連携による相乗効果

地区内外の地域資源と各土地利用ゾーンがそれぞれつながりを持ち、支えあうことで、地区としての魅力が高まります。そして地区に集う人達が、まちづくりを協働することがこれらを維持することにつながります。そこで、地区の共存と連携による相乗効果について検証します。

#### 住宅地ゾーンの場合

住宅地では、ここに住む居住者が、地域資源である自然や農空間を利用して、健康や癒しを実感することができます。また、業務地に進出が期待される企業への就業や、まとまった農地で就農することなどを可能とし、生活関連施設での買い物や、地元で採れた安全安心な農作物を手軽に食べることもできます。

下の図は、住宅地と関連する地域資源との共存・連携を表したものです。

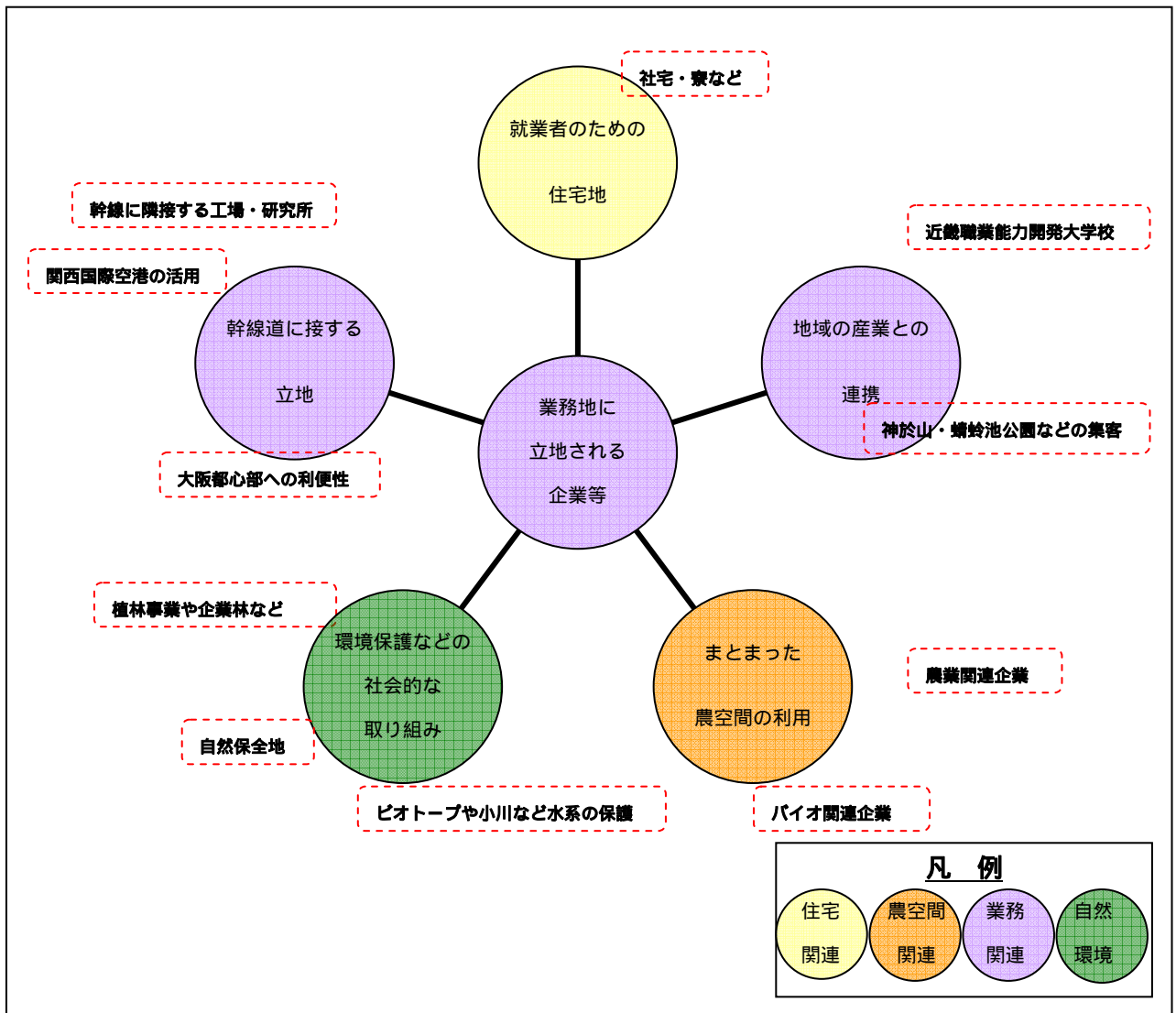


## 業務地ゾーンの場合

業務地では、地域資源である自然や農空間を利用した事業や、近畿職業能力開発大学校との産学連携の可能性があります、交通インフラ（大阪外環状線、阪和自動車道など）を利用した大阪都心部への利便性や、関空から世界へとビジネスチャンスを広げる可能性があります。

また、蜻蛉池公園や神於山に集う人達への物販やサービスを提供する可能性もあります。

下の図は単なる業務地としてではなく、地区全体の地域資源と共存・連携したビジネスによる相乗効果を表したものです。

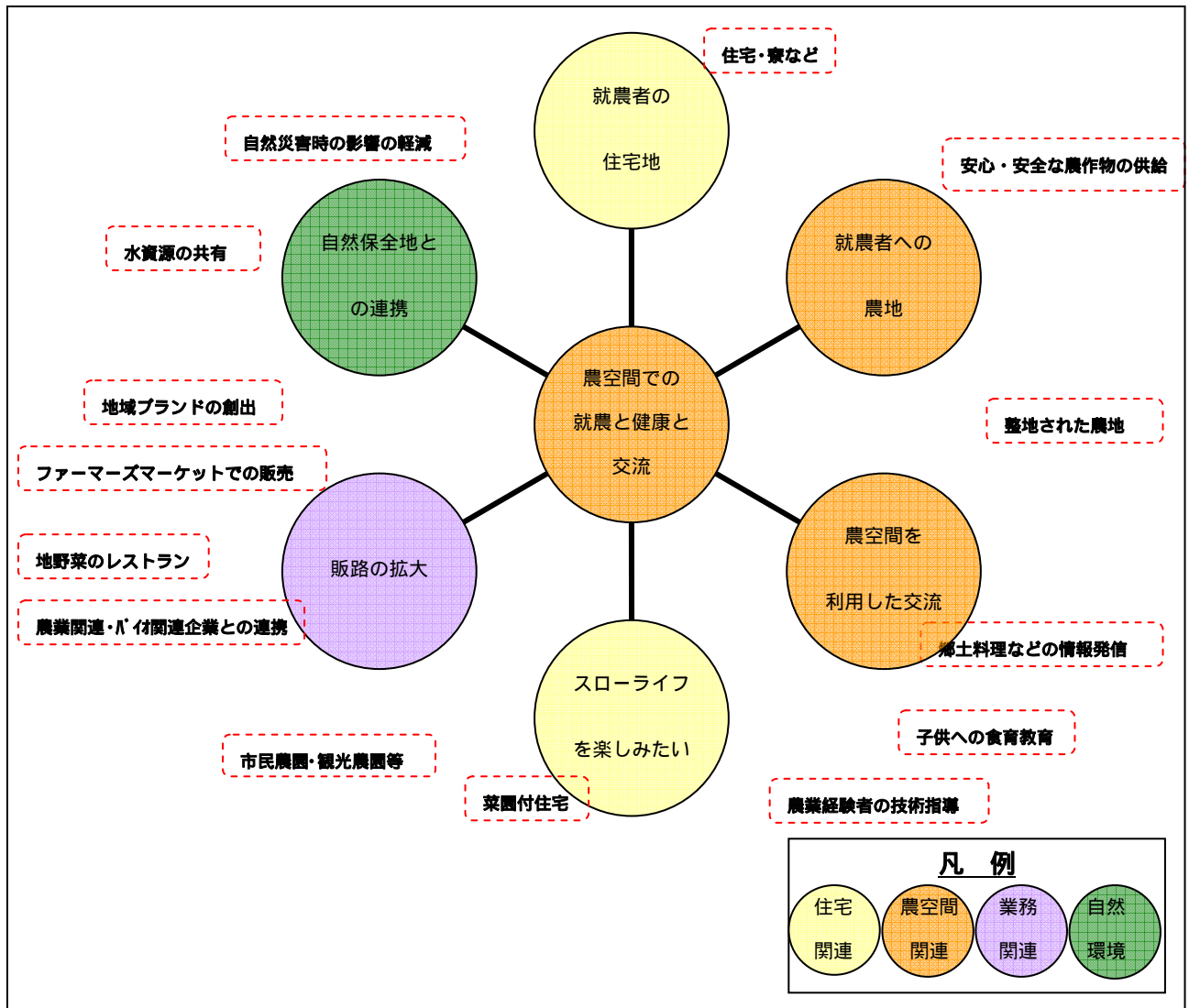


## 農空間ゾーンの場合

農空間ゾーンでは、営農を支援する基盤整備を行うことで、顔の見える安全安心な農作物の生産を創出します。この農作物は地野菜レストランや、加工品などとして来訪者に提供され、地域ブランドとして世界に発信していく可能性につながります。

また、家庭菜園や市民農園など手軽に農に触れてもらう空間として活用することで、余暇や健康を得るばかりでなく、この農空間に集う人達との交流も楽しむことができます。

下の図は農空間を中心とした人の交流・物の創造を表したものです。

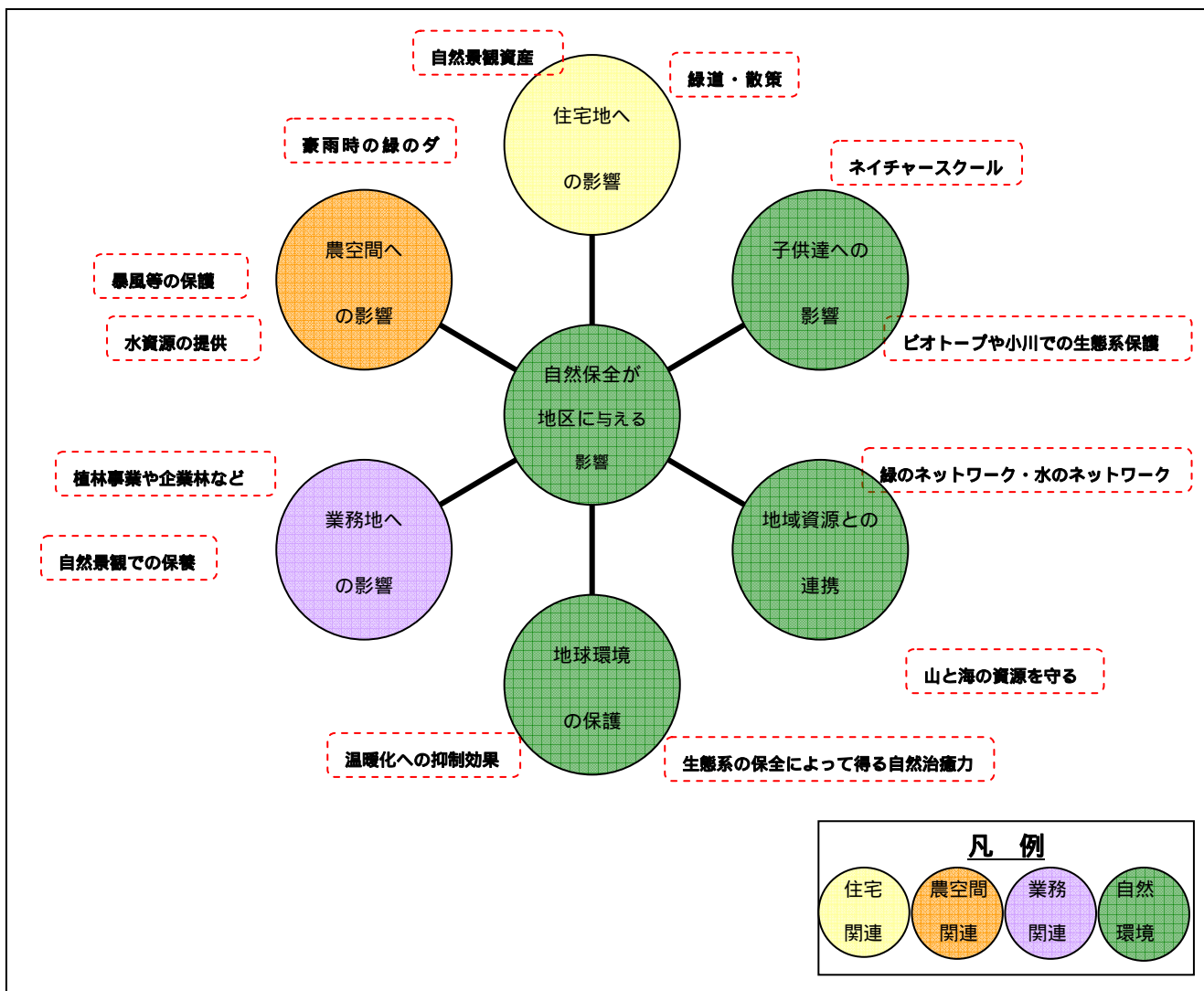


## 自然保全ゾーンの場合

自然保全ゾーンでは、前述した緑のネットワークや水のネットワークを活かし、環境保全や子供たちへの環境教育を創造します。

既存の里道を活用した散策道で、散歩やジョギングなどを行い健康や癒しを得ることや、水路・小川を利用したビオトープにより生態系の保全を図ります。

下の図は自然をひとつの資源とした相乗効果を表したものです。



ここまで検証しましたように、各ゾーンがそれぞれ共存・連携することで相乗効果を生み出し、地区の魅力を高めることができます。それが地区の強みとなって、他にはないこの地区ならではの『            タウン』を創造することとなります。

次に、地区ならではのまちづくりに必要な“仕組みづくり=仕掛け”を考えます。

## 2 仕組みづくり

地区に関わる様々な人たちが、まちづくりを考え、協働していくためにその仕組みづくりを考えます。

以下は、地元住民が中心となってまちづくりを実践している事例です。

### 「千葉県 和田町 ネイチャ - スク - ルWADA」

#### NPOと協力しながら体験交流事業を展開

東京を中心としたサラリ - マンの交流会「日比谷一水会」の代表S氏が、自然の中で学習したり、交流することを目的に、平成12年にNPO「ネイチャ - スク - ル緑土塾」を設立しました。

ネイチャ - スク - ルの開催場所として、自然が残っていること、開発されてリゾートやゴルフ場が主流の地域でないこと、東京から近いこと、人情が素朴であること、宿泊施設があること、を条件に対象地の選定が行われ、第一号として和田町でスク - ルを開催するに至りました。講師として、地元の農業・漁業従事者約40人が関わっています。



「花夢花夢」でのモデルガーデンづくり



実習として野菜や果物を栽培

### 「京都府 綾部市 里山ねっと・あやべ」

#### 「里山」 「人材力」 「ソフト力」を活用

平成12年5月初旬に綾部市企画広報課内に事務局開設、人員配置が行われ、地元説明会・現地視察の後、平成12年7月19日「里山ねっと・あやべ」が設立されました。

閉校となった小さな小学校を拠点に、21世紀の生き方・暮らし方を探求するための田舎暮らし初級ツアー、パン焼き工房体験、森林ボランティアによる里山づくり、農家民泊体験などのگریンツ - リズム、里山映像祭等の企画が行われています。



パン焼き体験（試食）



農家民泊でミノを着て大はしゃぎ



## 「兵庫県 多可町八千代区 フロイデン八千代」

### 美しく文化の香り高い農山村空間の形成

観光資源に乏しい中山間地域の環境を逆手にとり、都市住民向けの滞在型市民農園を企画。

卓越した運営ノウハウを駆使することにより、都市住民と地域住民の交流を促し定住化へ結びつけるなど、地域の活性化に貢献したのが、観光産業による地域づくりのカリスマ八千代町産業課長のH氏でした。彼は成功の核となった交流施設「フロイデン八千代」などのハ - ド及び運営ソフトの企画・立案を行った人物です。

彼は中途半端なモノではなく本物を作ろうと考え、海外の先進国であるドイツへ視察に出掛け、現地のノウハウを取得し、ドイツ風の外観を持つ施設、ネ - ミングを持った施設を作り上げた結果、近隣の都市住民の心を捉え、神戸方面を中心とした住民から応募が殺到することとなりました。



フロイデン八千代

## 「愛媛県 内子町 内子フレッシュパ - クからり」

### 内子フレッシュパ - クからりを拠点とした都市と農村の交流

1992年に内子町が策定した農業活性化計画「フル - ツパ - ク構想・基本計画」を基に1993年から1994年にかけて、合意形成するための座談会を農村部の集落で50回くらい開き、1994年特産物直売の実験場として「内の子市場」を開設することになり、呼びかけたところ70名の農業生産者、特に女性が多く集まりました。この実験と訓練が行われた一方で、特産物直売所と運営組織作りが行われ、1996年5月の連休中に「内子フレッシュパ - クからり」が開業しました。

1997年に運営会社として「株式会社内子フレッシュパ - クからり」を資本金2,000万円で設立しました。内子町が1,000万円を出資し、残りを内子町民や農協を初めとする諸団体が出資するという形態でスタートしました。代表取締役は内子町長、支配人兼施設長は役場からの出向です。



道の駅内子からりの朝市



特産物直売所

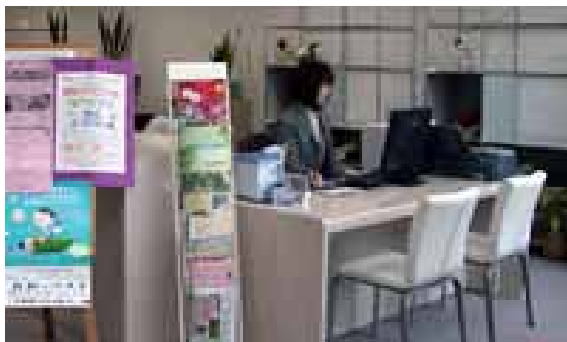
## 「彩都（国際文化公園都市）」

### 新しいまちづくりとコミュニティの形成と育成

新しいまちづくりと合わせたコミュニティの形成が図られています。「彩都スタイルクラブ」は、阪急が分譲する住宅の居住者や趣旨に賛同する彩都在住の住民を対象にした阪急の運営するコミュニティクラブです。以下の3つを柱に活動を展開しています。

- ・ウェブによるコミュニティの育成...まちづくりポータルサイト「彩都NAV I」の開設・運営。
- ・共用施設を通じたコミュニティの活性化...キッチンスタジオ、キッズルームなど「ジオ彩都みなみ坂」の共用施設を活用したコミュニティづくり。
- ・彩都サービスフロントの運営...「彩都サービスフロント」を窓口、各種サービスを実施。

同クラブの会員（毎回、定数10組）を対象に、いろいろなイベントが開催されますが、農業と触れあうイベントとして、年4～5回、「彩都のファーマー体験」イベントが開催されます。このイベントでは、地元農家の協力で酒米の田植え～稲刈り～お餅つきまで、さらに野菜収穫等も含めて農業について教わりながら体験することができます。



彩都サービスフロント



彩都のファーマー体験

## 「モクモク手作りファーム（運営：農事組合法人 伊賀の里）」

### 観光農業公園の運営

モクモク手作りファームは三重県伊賀市に1995年に開設された農業公園で、主に銘柄豚「伊賀豚」の飼育から、その豚を使ったハム・ソーセージの加工生産、販売までを一貫して行っています。

その前身は「伊賀豚」の養豚農家を中心に設立した「ハム工房モクモク」です。ハム・ソーセージの販売を始めた初年度から赤字続きの状態でしたが、体験教室「手作りウインナー教室」が成功を収めたことから、徐々に名前が知られるようになりました。現在では、基盤となる直営農場と農産加工の各工房の運営のほか、年間34万人の来園者を誇るファクトリーファーム（農業公園）の運営、会員制の農産物の通信販売、さらに中京圏を中心に各所に直営レストランを開設し、その経営等も行っています。



手作りウインナー教室



モクモクの農場レストラン「津」

全国の事例にもありますが、それらの成功の秘訣は、

**地域の人々が徹底した話し合いをし、知恵を出し合う。  
社会が望むものを捉えるために情報の収集と発信を行う。  
運営していくためのマネージメントを行う。**

であります。

地域の様々な人達がやりがいを持って働き、関わり、支えあい、共感し合うために地区内の協力と共に地区内外の人々（サポーター）と協力して、知識者や経験者（アドバイザー）のノウハウを活用する「仕組みづくり」が必要であり、決してマネをするのではなく地区ならではの『            タウン』を創っていくことが重要です。